

キャラクター名
風雲 秋貴 (カザクモ シュキ)

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ		ワークス	ヒーロー候補生A	カヴァー	ヒーロー
	モルフェウス			年齢	17歳	性別
オプション	覚醒	探求	衝動	恐怖	初期侵食率	41 %
出自	待ち望まれた子		経験	平凡	邂逅	師匠

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	56
肉体	4	1	0			5	行動値	3
感覚	2		0			2	(非装備時)	5
精神	0		0	1		1	戦闘移動	10
社会	2		0			2	全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	6		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:ヒーロー	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
聖剣の王者	白兵	5r+6	7	15		マイナー使用C値-2(下限4) 暴走時攻撃不可
クリスタルシールド	白兵	5r+5	12	0		超軽量化適用
聖剣の一撃	白兵	8r+5		15		基礎コンボ
ディバインセイバー	白兵	18r+5		41		100↑コンボ

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
アーマーコスチューム		8	-1	-2	HPダメージ3点軽減

所持品	
ヒーローズクロス	
カテゴリ:ルーキー	
ユニバーサルフォン	
思い出の一品	
ウェポンケース	
コネ:ヒーローマニア	
コネ:手配師	

合計装甲: 8 合計回避: -1

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
遺産継承者	P	N		
円卓の騎士 (RE)	P	N		
姫宮沙良 (GR)	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 36 残り財産P: 10

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
クイックダッシュ	1	4	セット	至近	自身	自動		
効果: 戦闘移動								
フルパワーアタック	3	4	セット	至近	自身	自動	80↑	
効果: 攻+ [LV*5] 行動値0								
サポートデバイス	2	6	セット	至近	自身	自動	80↑	
効果: 【肉体】+ [LV*2]d								
C:モルフェウス	3	2	メジャー					
効果: C値-LV (下限7)								
カスタマイズ	3	2	メジャー	武器		対決		
効果: +LVd								
クリスタライズ	1	4	メジャー			対決	100↑	
効果: 攻+ [LV*3] 装甲無視								
ギガノトランス	1	20	メジャー	視界	シーン選択	対決	120↑	
効果: 対象、射程変更								
軍神の守り	1	2	オート	至近	自身	自動		
効果: カバーリング								
剣精の手	1	2	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果: ダイス目1つを10に変更								
巨人の生命	5	初期+3	常時	至近	自身	自動		
効果: 最大HP+ [LV*5]								
黄金練成	3	初期+3	常時	至近	自身	自動		
効果: 常備化P+ [LV*10]								
超軽量化	1	初期+2	常時	至近	自身	自動		
効果: LV個の武器の装備制限解除								
体型維持	★		常時					
効果: 望んだ体型を維持								

騎士を自称する駆け出しヒーロー。

幼少のころから「アーサー王伝説」に憧れていた。アーサー王を始めとした煌びやかな装備に身を固め、聖剣を輝かせる騎士たち。秋貴は守られるヒロインよりも、誰かを守る騎士になりたいと思っていた。

そんな折、何気なくテレビでやっていたヒーローショーを見ると1人のヒーローが身を挺して周りのヒーローを守る姿が目に入った。ナンバーワンヒーロー、「パラディン」の姿が。秋貴は目を見張った。それは彼女が夢見る「騎士」の姿そのものであったからだ。ヒーローになりたい。心から強くそう思った。

しかし秋貴には力がなかった。いつものように学校に通う日々。しかし、その日は少し違った。好奇心から迷い込んだ路地でヴィランに襲われてしまったのだ。絶体絶命、そう思われたその時。彼女の頭の中に声が響いた。『力が欲しいか』『自らを守る力が』その声に対して秋貴は返した。「いいえ」「自分だけじゃなく」「誰かを守る力が欲しい」その声にこたえるように視界の隅に光が灯った。秋貴がその光のところに走っていくとそこには一振りの光り輝く剣が落ちていた。『気に入った』『我と契約せよ』『さすれば力が手に入る』目の前の剣はそう語った。

